世界最大の節足動物

タカアシガニ

水族館へ行こう！

京都大学白浜水族館

1

白山 義久

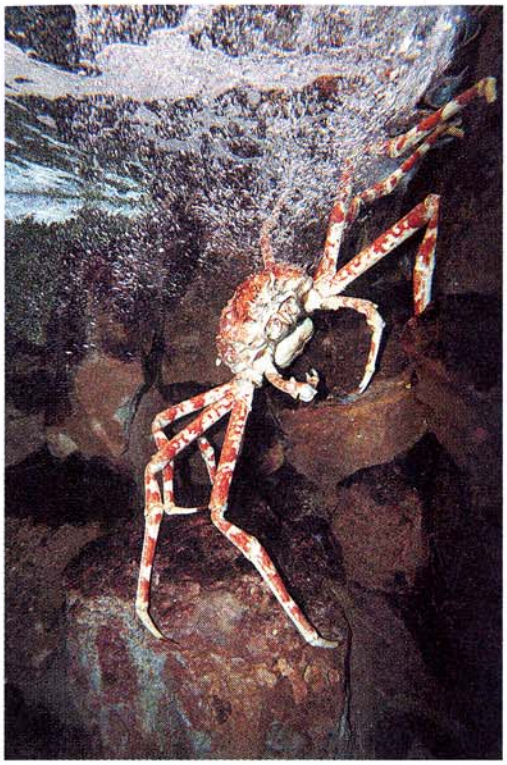
浮力に支えられ巨大化

はさみ脚を広げると3メートル以上になるタカアシガニは、現存する節足動物の中で世界最大の生き物である。海中では浮力のおかげで重力から解放されるため、ここまで巨大化できたのだ。

陸上に生きる動物は、重力に抵抗して体を支える骨が必要。骨には内骨格と外骨格があり、エビやカニ、昆虫、クモ、ムカデなど節足動物は体の外側に殻を持つ外骨格である。

外骨格が体を覆っているため、成長のたび、その殻を脱ぎ捨て新たな殻を作らないといけない。これが脱皮であり、外骨格を持つものの宿命だ。

このため、脱皮直後は〝骨なし〟の体を筋肉だけで支えなくてはならない。陸上ではおのずと上限が決まってくる。昆虫のナナフシの仲間は体長30センチほどになるが、タカアシガニの足元にも及ばない。



△水の落ち口がお気に入りのタカアシガニ（水槽番号223）

水族館では2匹のタカアシガニを飼育展示している。歩脚を使ってすっくと立ち上がり、餌のアジやエビ、オキアミを与えると長いはさみ脚で上手に食べる。海水の浮力のおかげで苦労せずに大きな甲羅を持ち上げることができるのだ。空気中では立つことも歩くことも満足にできない。

タカアシガニは、大きくて食べ甲斐がありそうだが、ほかのカニに比べると肉質は水っぽく大味である。しかし、話題性があるので、観光用食材として珍重されている。駿河湾では静岡県沼津市戸田を中心にトロール漁業が盛んだ。紀南地方では漁業の対象にはなっていないが、イセエビやヒラメの刺し網に混獲され、時折、市場に並ぶ。

海産生物は一般に分布が広い。しかし、タカアシガニは日本沿岸だけにしか生息していない（最近台湾でも確認）。わが国の固有種とも言える。系統分類学的には大変古いグループで、生きている化石のひとつにも数えられている。人為的な影響もあり、近年、タカアシガニの生息数が激減しているという。この希少種を保全するのは日本人の責任だと言えるだろう。（京都大学瀬戸臨海実験所長）

京都大学瀬戸臨海実験所の教員や技術職員が、京大白浜水族館で飼育している生き物を分かりやすく解説します。